

齋藤 せつ子（さいとう・せつこ）

1、プロフィール

小説家。昭和 36 年、同人誌「土偶」創刊に参加。9号掲載の「健やかな日常」が第 13 回新潮社同人雑誌賞を受賞。同作はまた第 56 回(昭和 41 下半期)芥川賞の候補となる。

<生没>

1930(昭和5)年4月17日 ~ 2018(平成30)年7月9日

<代表作>

短編小説「おんな川」「健やかな日常」「はてはての」「遠い近景」

長編小説「水の口吻け」

<青森との関わり>

黒石市生まれ。昭和 37 年、月刊タウン誌「北の街」を創刊。出版業をおこし、社主として地方文化向上に貢献。

2、作家解説

小説家。昭和5年(1930)黒石市生まれ。黒石高等女学校から官立青森青年師範学校に進む。太宰治の心中事件にショックを受け、読書も太宰治、坂口安吾、石川淳、織田作之助等の新戯作派に惹かれる。学校中退。そして結婚、出産。思わぬ夫の闘病生活。暮らしのためにさまざまな職業につく。持ち前のバイタリティーで生活の修羅場をきりぬける。

昭和 34 年「青森文学」に入会。数編発表。習作といえる作品ながら作家的素質の光るものがあつた。「松屋敷」はその頃の作品で、津軽の旧家にまつわる因縁・因果話である。昭和 36 年、同人雑誌「土偶」創刊に参加。「おんな川」(「土偶」8号)が「文学界」(40 年 11 月号)同人雑誌ベスト5に選ばれる。「健やかな日常」(「土偶」9号)で昭和 41 年 12 月新潮社同人雑誌賞受賞。同作品が第 56 回芥川賞(昭和 41 下半期)候補作となる。井伏鱒二、尾崎一雄に高く評価された。続い

て「新潮」に「はてはての」(昭和 46 年3月号)、「遠い近景」(昭和 52 年3月号)を
発表する。「遠い近景」も特異な素材で、複雑な人間関係を的確に抑制のきいた
筆致で描いている。

また、月刊誌「きたおう」に「水の口吻け」(昭和 51 年7月～昭和 52 年 6 月)、
「陸奥新報」に「風の視線」(昭和 62 年3月～7月)をそれぞれ連載、好評を博した。
彼女には小説家のほか、もう一つの貌があった。昭和 37 年7月、月刊タウン誌
「北の街」を創刊。「同人誌とは違う立場から、地方でものを書く人々に発表の場
を提供したい」という念願が主旨で、さらに出版業をおこした。それが開花し、「北
の街」は 50 年を超える誌歴を有し、平成 30 年 7 月現在 671 の号数をかぞえた。
北の街社主として地方文化の担い手として、その向上に大きく貢献した。

3、資料紹介

○「健やかな日常」(雑誌「土偶」第9号掲載)

雑誌

1966(昭和 41)年4月1日

210mm×145mm

昭和 41 年、同人雑誌「土偶」(9号)発表の短編小説。「私」のヨロメキ現場が夫
におさえられ、ゴタゴタし、騒動がおさまるまでの記である。この種の題材にみかけ
るしめっぽさが全くない。「私」はまことにユニークな造型である。結末も心憎いほど
利いている。